三河国、
ここにはじまる！

安城市教育委員会・土生田純之 編

・桜井古墳群・鹿乗川流域遺跡群の歴史的価値をわかりやすく解説し、
「三河国」につながる地域性を探る。
・研究者・地域住民・教育委員会が心を開いて討論し、
地域の「文化財とまちづくり」を考える。

雄山閣 定価（本体 2,400 円＋税）

3 鹿乗川流域遺跡群の概要

岡安雅彦

はじめに

岡崎市島坂町から安城市寺領町にかけての鹿乗川・西鹿乗川流域には、南北約5kmにわたって連綿と遺跡が分布しており、これらを総称して鹿乗川流域遺跡群とされている。遺跡群は、位置的に大きく北群と南群の2地区に分けられ、北群は坂戸、神ノ木、上橋下・下橋下、古井堤、彼岸田、中狭間、亀塚、本神の各地区から、南群は姫下、寄島、下懸、五反田、加美、惣作の各遺跡から構成されている[1]。ここでは鹿乗川流域遺跡群の概要を紹介する。

図1　鹿乗川流域遺跡群の地区区分

1　鹿乗川流域遺跡群の調査研究史

鹿乗川流域遺跡群のうち、亀塚遺跡以北の遺跡については1960年代から安城市教育委員会等による調査の積み重ねによって、これらの遺跡が西三河を代表する弥生時代から古

墳時代にかけての集落であるという評価が高まった。1984（昭和59）年には神谷友和によって「古井遺跡群」と呼ぶことが提唱された（神谷1985）。1998（平成10）年から2002年にかけて行われたほ場整備に伴う安城市教育委員会の発掘調査などにより、遺構・遺物の情報は飛躍的に増加し、その調査成果は2000年以降、『鹿乗川流域遺跡群』として刊行され始めた。一方、1996年以降に始まったによる上橋下遺跡を嚆矢とする、主に鹿乗川拡幅工事に伴う発掘調査によって、亀塚遺跡より南側に位置している姫下遺跡・寄島遺跡・下懸遺跡・五反田遺跡・惣作遺跡などの遺跡についても、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡としての様相が次第に明らかとなってきた。最近では最も南側に位置する寺領町の惣作遺跡までを含めて鹿乗川流域遺跡群として扱うことが定着しつつある。

2　鹿乗川流域遺跡群の変遷

（1）弥生時代前期

鹿乗川流域遺跡群で最初に集落の形成が始まるのは弥生時代前期で、北群の中狭間地区と南群の惣作地区で認められる。中狭間地区では焼土面に条痕文土器が伴って出土し、この上層では、条痕文土器や遠賀川系土器壺が出土している。南群は、惣作遺跡においてわずかではあるが該期の遺構・遺物が確認されている。いずれの地区も、遺構・遺物の量は限られており、集落としても沖積地上に進出が始まった初期段階の、小規模なものであった可能性が高い。

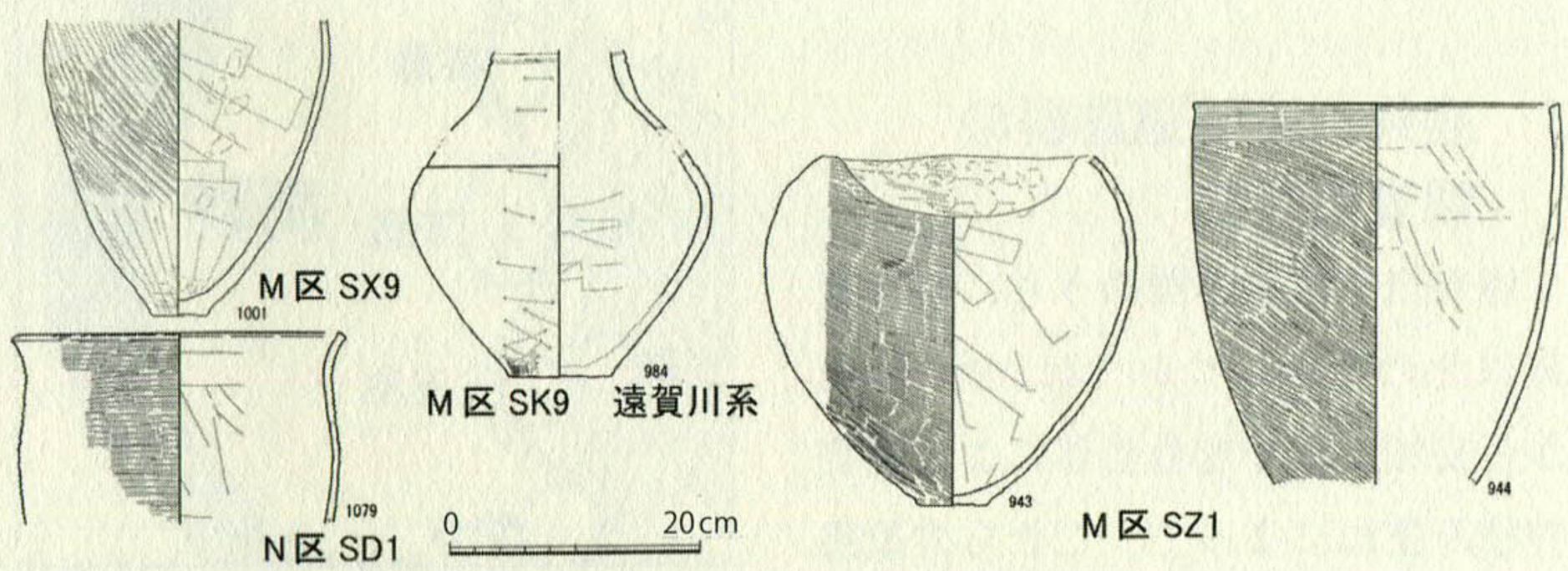

図２　中狭間地区出土の弥生時代前期の土器

(2) 弥生時代中期

中期前葉は、北群では古井堤地区・中狭間地区でまとまった遺構・遺物が確認できる他、上橋下・下橋下地区でも、わずかながら遺構・遺物が確認できる。前期には小規模であった集落が、この時期には規模を拡大したことを物語っている。南群では、惣作遺跡において当該期の竪穴住居等が検出されており、引き続き小規模ながら集落が継続していたようである。

中期中葉には、北群では引き続き中狭間地区で多量の遺物が出土し、住居址も1棟検出されている。上橋下・下橋下地区でも狭い範囲ではあるが、遺構・遺物が検出されている。南群は、惣作遺跡でわずかに遺構・遺物が確認できる程度である。

中期後葉は在地の古井式土器と、西方からの影響による凹線文系土器が共伴して出土する時期であるが、北群では上橋下・下橋下地区以外は、ほとんど確認できず、この地区が中核的な集落として存在していたと考えられる。南群は、下懸遺跡・加美遺跡・惣作遺跡で遺構・遺物が確認できるが、いずれも小規模なものである。

(3) 弥生時代後期・終末期

北群では上橋下・下橋下地区が、南群では、惣作遺跡が引き続き中心的な集落となっている。上橋下遺跡と神ノ木遺跡でこの時期の方形周溝墓が検出され、墓域を形成している。彼岸田地区もこの時期から居住域となっていくようである。

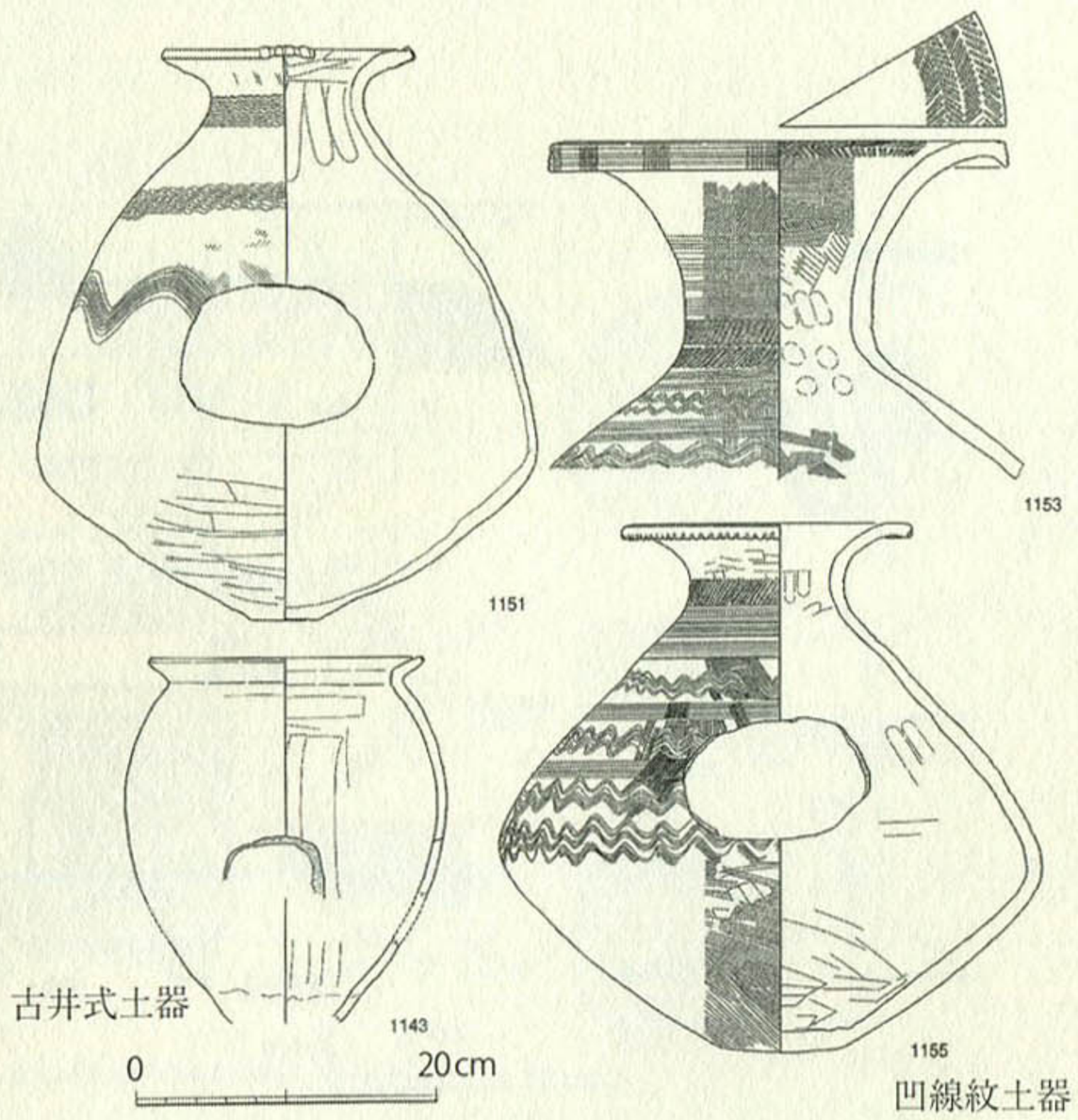

図3　上橋下・下橋下地区出土の弥生時代中期後葉の土器

終末期は、鹿乗川流域

遺跡群の各地区で最も多く遺構・遺物が検出される段階で、各地区で盛期を迎えるようである。上橋下・下橋下地区はこの時期の溝が複数条確認されており、環濠となる可能性があるが、そうだとしても全周するのではなく、西側の西鹿乗川を利用して区画している可能性が高い。中狭間地区ではこの段階から再び遺構・遺物が確認され始める。亀塚遺跡はこの時期を中心とした遺跡で、遺構は不明瞭であるが、人面文土器をはじめとした線刻資料が21点、南関東系などの外来系土器が多数出土しており、注目される。本神遺跡はこの時期を中心とした台地上の環濠集落で、畿内系の叩き甕が多数出土している。南群では下懸遺跡で大量の土器廃棄が見られ、遺構も調査区全域で確認できるなど、盛期を迎える。外来系土器も北陸・山陰系、南関東系、畿内系、遠江・駿河系など13点が出土したほか、線刻土器、木製短甲なども出土している。五反田遺跡もこの時期から古墳時代前期の遺跡で、方形周溝墓と考えられる遺構が複数検出されていることから、北側に隣接する下懸遺跡の墓域であった可能性が高い。惣作遺跡は後期ほどではないものの、引き続き遺構・遺物が見られ、集落が継続している。

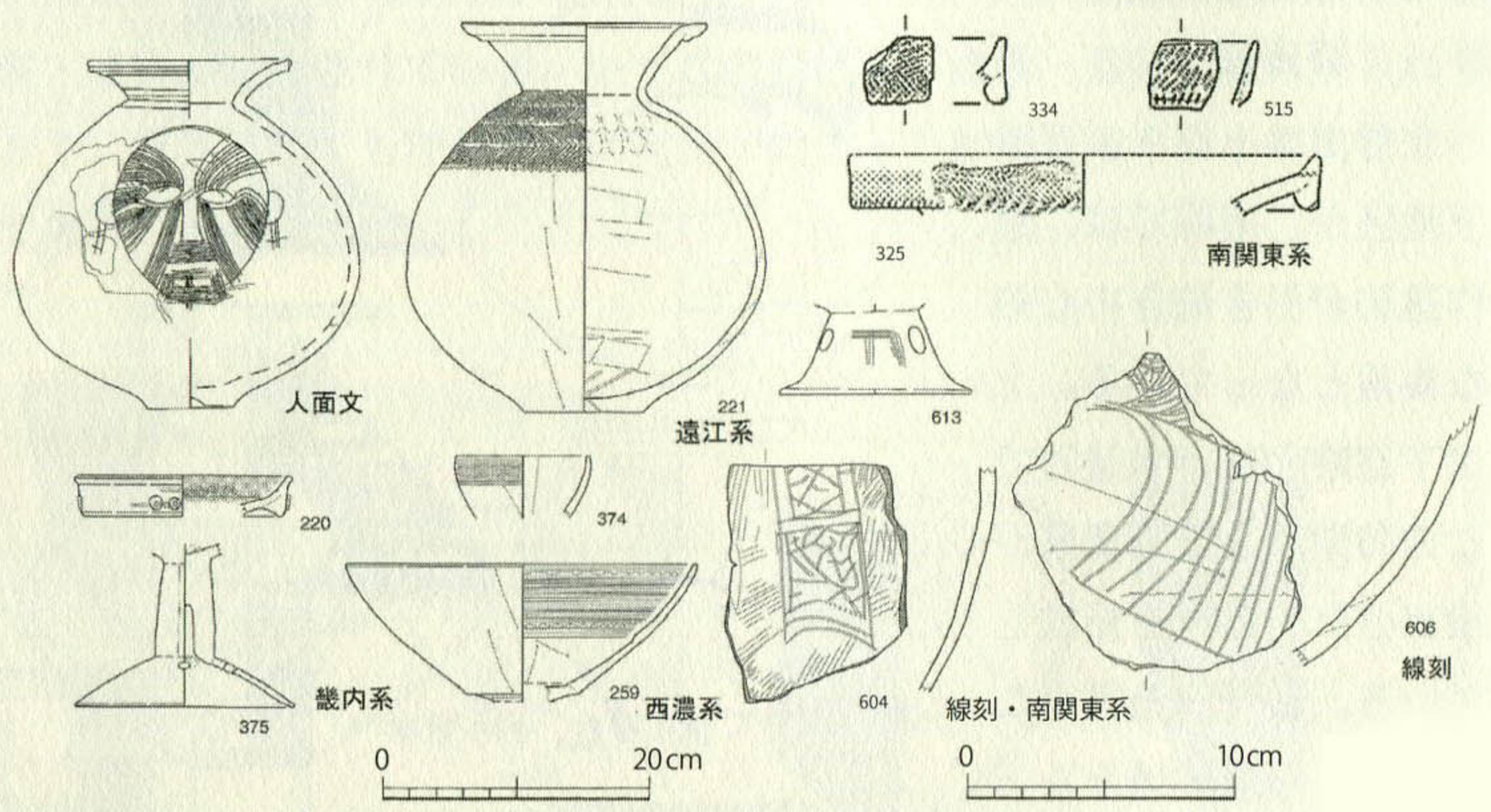

図４　亀塚遺跡出土の弥生時代終末期の土器

（4）古墳時代前期

北群では中狭間地区と神ノ木地区、南群では姫下遺跡と惣作遺跡が中心となっている。中狭間地区ではトレンチ調査にもかかわらず、竪穴住居が多数検出され、この時期の中心的な集落であったと考えられる。また、北陸系土器が46点出土していることが注目される。弥生時代後期には墓域であった神ノ木遺跡では、この時期から竪穴住居が見られるようになり、居住域へと変化している。古井堤地区では、この時期の大型の溝状遺構が検出され、赤彩・底部穿孔などが見られる二重口縁壺が9点出土している。トレンチ調査のためはっきりしないが、古墳の周溝の可能性があり、これらの土器は、その供献土器と考えられる。古井堤地区の南側を中心に住居・井戸などの遺構が見られ、中期にかけての北群の中核的な集落となっている。

なお、弥生時代以来継続的に営まれている北群の集落に対応する古墳としては、隣接する台地上に築造されている全長68mの前方後方墳である二子（ふたご）古墳、全長42mの前方後円（方）墳である塚越（つかごし）古墳が挙げられるが、両者ともこの時期の築造である。

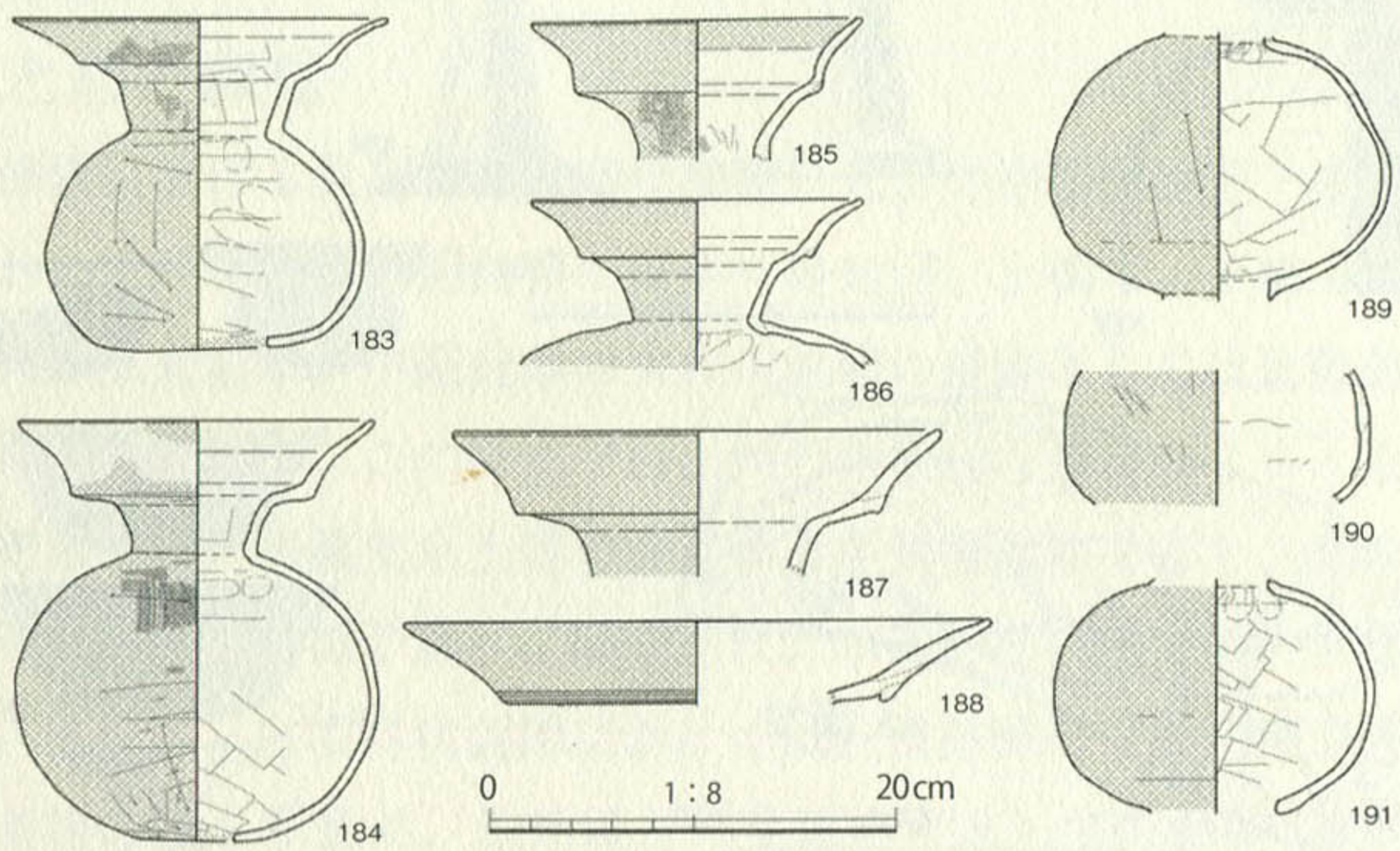

図5　古井堤地区SX1出土の古墳時代前期の土器

南群は姫下遺跡がこの段階に盛期を迎えている。遺物には人面文などの線刻資料の出土に加え、畿内の布留系の土器が多量に出土している。布留系土器がこれだけ出土した遺跡は東日本ではほとんどない。遺跡のすぐ西側の台地上に造営された全長65mを測る姫小川（ひめおがわ）古墳は、前方後円墳であり、両者の関連が注目される。また、至近距離にある南北28m、東西25mの方墳である姫塚（ひめづか）古墳や、墳丘は滅失しているが、内行花文鏡が出土したとされる八ツ塚（やつづか）古墳もこの時期の築造と推定されている。姫下遺跡以外では、寄島遺跡、下懸遺跡、惣作遺跡も前時期から継続しているよう

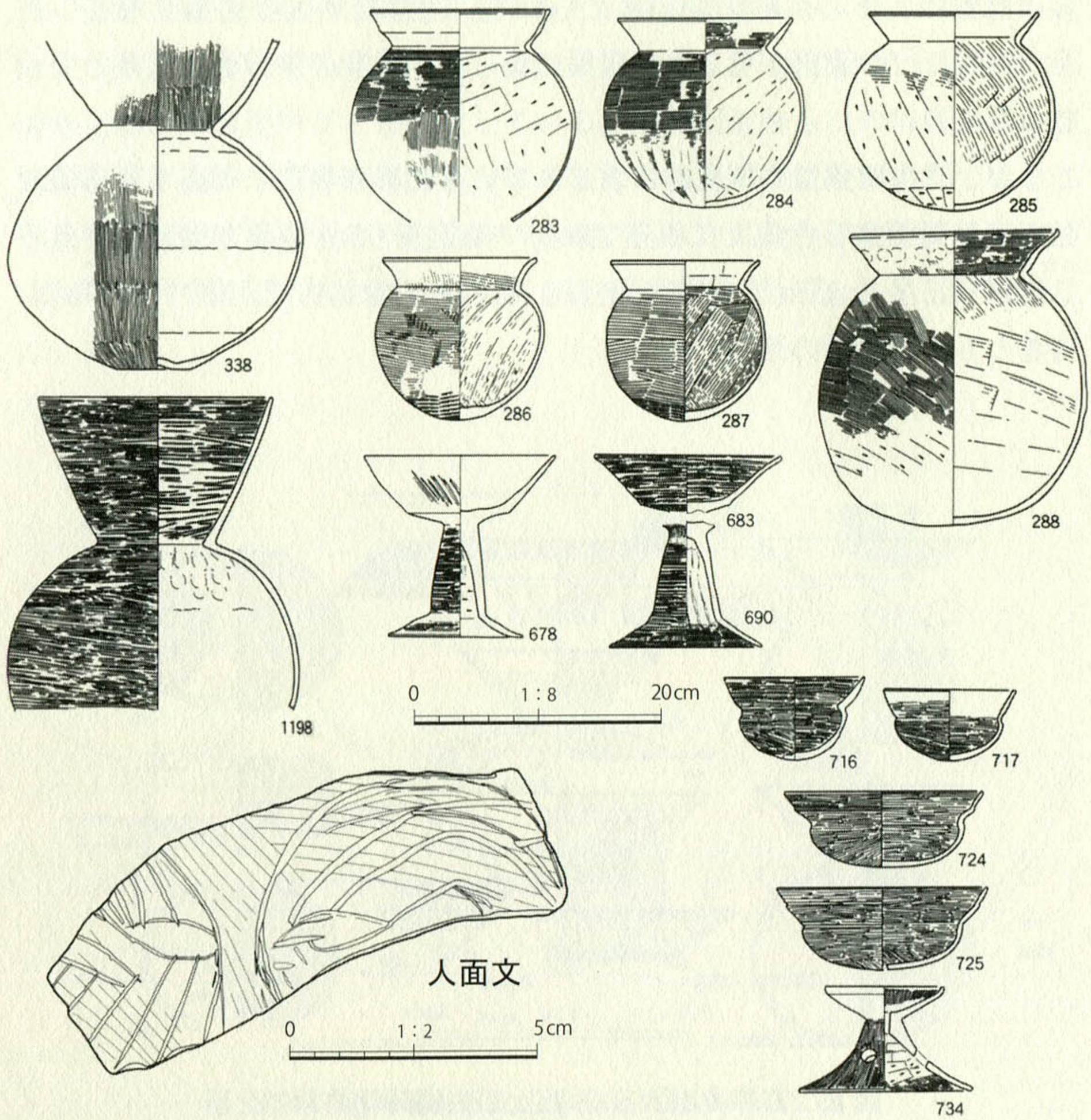

図６　姫下遺跡出土の畿内系土器

だが、この時期の末には、南群の遺跡は北群の遺跡よりも一足先に衰退に向かう。なお、寄島遺跡では、この時期の方墳または前方後方墳の周溝の一部である可能性がある遺構が検出されており、北群と同様に台地上だけではなく、沖積地においても古墳の築造が開始されていた可能性があることは注意すべきである。

(5) 古墳時代中期

北群では上橋下・下橋下地区、古井堤地区、彼岸田地区と神ノ木地区が中心的な居住域となる。彼岸田地区では遺跡群内で確認できる最古の竈を伴う住居が確認される他、上橋下・下橋下地区では、竪穴住居と認定できなかったが、竈を伴う住居内の土壙である可能性が高い遺構が検出されており、引き続き居住域として利用されている。古井堤地区、神ノ木地区でも前期から居住域が継続している。坂戸地区では祭祀遺構から、多量の土器と滑石製勾玉形石製模造品などが出土している。

南群では、この時期には前期の姫小川古墳、姫塚古墳に続いて、桜井古墳群唯一の埴輪を出土した全長40m以上の前方後円（方）墳である獅子塚古墳が築造されるが、現時点ではこれに対応する集落遺跡は見つかっていない。北群ではこれ以降は散発的に遺物が見られる程度となり、集落としては一旦途切れるないしは極めて希薄となるようだ。

3　まとめと課題

本遺跡群における集落は弥生時代前期に北群の中狭間地区・南群の惣作遺跡において始まり、中期前葉には古井堤地区、上橋下・下橋下地区、坂戸地区にも拡大する。中期前葉の矢作川流域の遺跡としては比較的規模の大きな遺跡群であり、この時点で西三河の中核的な集落の１つとなっていたと考えられる。凹線文系土器が波及する中期後葉になると、北群では集落はほぼ上橋下・下橋下地区に限定され、本遺跡群の中での大きな画期を迎える。後期から古墳時代前期にかけては、遺跡群のほぼ全域で遺構が見られ、遺物の量も多量で、他地域との交流拠点としての機能も持つなど、遺跡群を通して最盛期を迎える。古墳時代前期には、二子古墳、姫小川古墳、塚越古墳、姫塚古墳が築造される。南群の集落は古墳時代前期をもっ

て一旦集落が見られなくなる。古墳時代中期には、北群の古井堤地区、神ノ木地区が中核的な集落で、上橋下・下橋下地区、彼岸田地区、中狭間地区、坂戸地区にも同様に集落が展開していたと考えられる。北群もこの時期までは遺構・遺物が見られるが、後期以降は非常に少なくなり、集落としては中期をもって一旦衰退していくと考えられる。再び遺構形成が活発になるのは７世紀後半から８世紀に入ってからのことである。

鹿乗川流域遺跡群の特徴は、第１に弥生時代から古墳時代にかけての西三河南部における拠点的な集落であることである。規模が大きいだけではなく、地区により消長があるものの、弥生時代前期から古墳時代中期にかけて、ほぼ途切れることなく遺物が出土しており、継続的な集落の営みが確認できる西三河では数少ない遺跡群である。

また、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、多量の外来系土器が出土することも大きな特徴である。北群と南群の総数は680点を数え、全国的に見ても非常に多く、尾張・西濃・伊勢といった伊勢湾沿岸地域はもとより、近畿地方や北陸地方、遠江～相模、南関東地方までの中での交流が認められる。一方、東日本各地で出土する土器には、西三河の特徴を持つものが少からず認められる。また、人面文をはじめとする土器線刻も、東海地方では大垣・一宮・清洲と鹿乗川流域遺跡群に集中して分布しており、古墳時代には東日本にも波及する。このように外来系土器や線刻土器の動きから、古墳時代開始期における東日本地域の動向に、西三河における交流拠点であった鹿乗川流域遺跡群が重要な役割を果たしていることが指摘されている（北島2002）。

弥生時代末から古墳時代前期にかけては、全国各地で外来系土器を出土する他地域との交流拠点となる集落が目立つようになるが、西三河における交流拠点がこの鹿乗川流域遺跡群であった。他地域の交流拠点は、海岸に面した潟湖周辺に立地することが多いが、海に面した西尾市域ではなく、やや奥まった鹿乗川流域遺跡群に交流拠点となる集落が営まれた意味は今後の検討課題である。

また、鹿乗川流域遺跡群と、桜井古墳群との関連はどうであろうか。桜井古墳群は、北群の二子古墳と南群の姫小川古墳を契機に、前期のうちに

表１　鹿乗川流域遺跡群の地区ごとの消長

群区分	地区・遺跡名	樫王	水神平	岩滑	古井堤	瓜郷	古井	長床	八王子	山中	欠山	元屋敷古	元屋敷新	神明Ⅰ	神明Ⅱ	神明Ⅲ	神明Ⅳ
北群	坂戸地区			中量				中量		中量	多量					中量	
	神ノ木地区									多量		少量	多量	中量	中量	中量	
	彼岸田地区									多量	多量		中量		中量	中量	
	上端下・下橋下地区		少量	少量		中量	中量	多量	多量	中量	多量		中量	中量	中量	中量	
	古井堤地区			多量	多量	中量					中量		多量	多量	多量		
	中狭間地区	中量	少量	中量	中量	多量	中量				中量	多量	多量	中量	少量		少量
	亀塚地区									中量	多量	少量					
	本神地区									少量	多量	少量			中量		
南群	姫下遺跡						少量						多量	多量			
	寄島遺跡										中量	中量	中量	中量			
	下懸遺跡							少量	中量		多量	中量	中量				
	加美遺跡							少量								少量	
	五反田遺跡										多量	中量					
	懇作遺跡		中量	中量		少量	中量	中量	中量	多量	中量	多量	中量	多量			

遺構・遺物量　多量　中量　少量

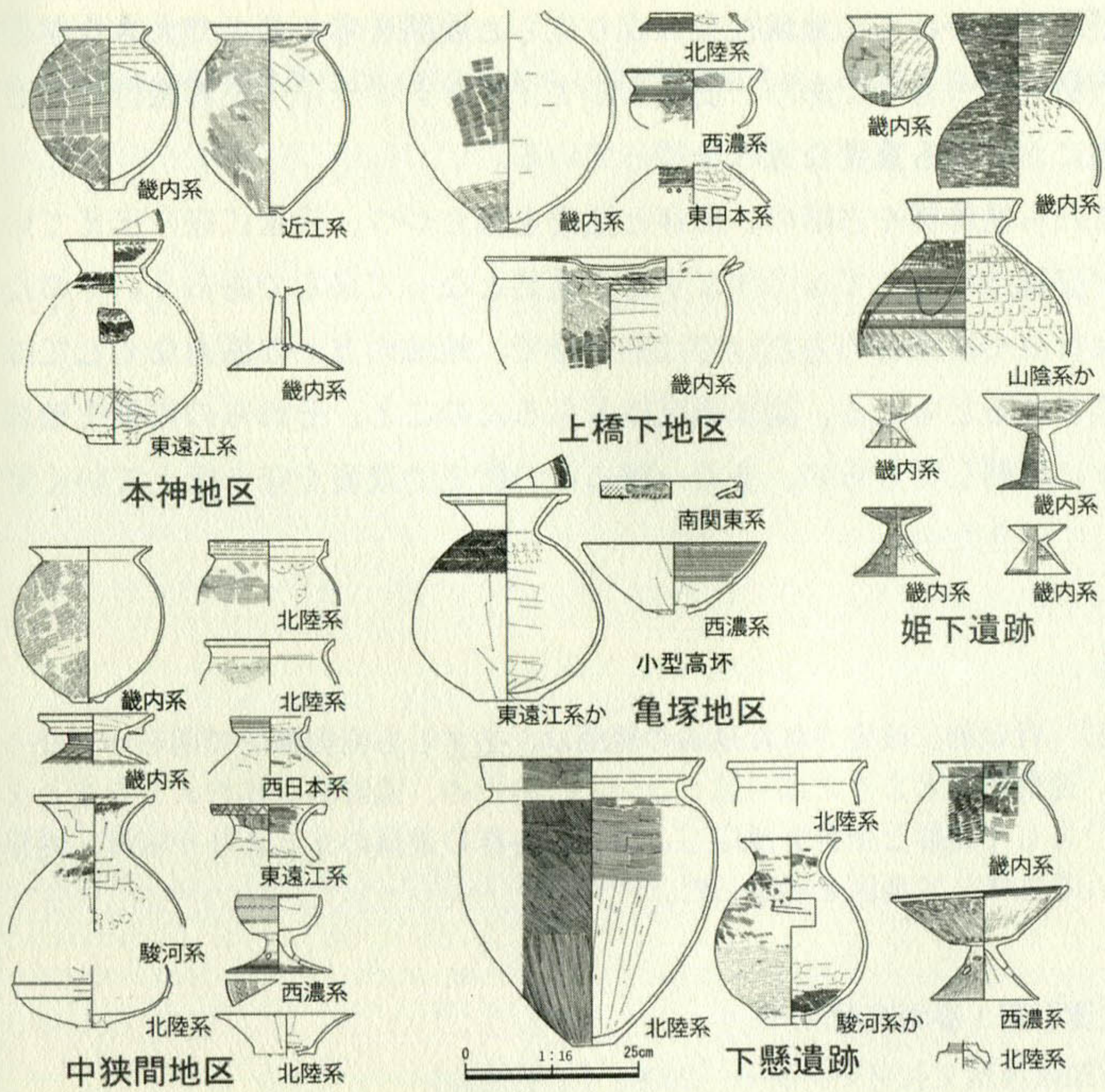

図７　鹿乗川流域遺跡群の外来系土器

北群の塚越古墳、南群の姫塚古墳・八ツ塚古墳が、中期初頭までに南群の獅子塚古墳が築造される。沖積地の鹿乗川流域遺跡群と碧海(へきかい)台地上の桜井古墳群は非常に近接して立地しており、相互に密接に関連して存在していたとしてよいだろう。ただ、碧海山古墳など、時期が確定されていない古墳もあり、集落が古墳時代中期までは確認出来ることから、これらの集落に対応する時期の古墳である可能性も考えられ、古墳の基礎情報の収集も必要である。さらに、全容は明らかではないが、二子古墳・姫小川古墳とほぼ同時期に、古井堤地区 SX1 のように沖積地において周溝を伴う古墳の可能性が高い墳墓が出現していることは注意すべきであり、台地上の古墳との関連も今後の検討課題である。

このような特色を持つ鹿乗川流域遺跡群と桜井古墳群は、弥生時代から古墳時代にかけての地域社会の成り立ちと展開を考える上で大きな学術的な価値を持つものであり、安城市のアイデンティティーを特徴付けるという点においても重要な意味を持っている。

これら遺跡群や古墳の、保存と活用を図りつつ、後世に守り伝えていく事が安城市にとっても今後ますます重要となって来るであろう。そのためには行政や研究者の力だけでは不十分で、地域の方々の協力なくしては不可能であると考える。調査研究はもちろんのこと、それらの成果を地域の方々に理解してもらい、また一緒にこの歴史的遺産を守り伝えていく努力をしていきたい。

註

(1)　行政的に設定された遺跡の範囲は、必ずしも発掘調査で明らかとなった遺構のまとまりとは一致しない。このため、遺跡群全体の大きなまとまりとして北群と南群を設定し、さらに各群の遺構のまとまりや密度・性格等を加味して地区を設定した。

主要引用・参考文献

愛知県埋蔵文化財センター　2009a『下懸遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター　2009b『惣作遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター　2012a『姫下遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター　2012b『惣作遺跡』
安城市教育委員会　1998『本神遺跡』
安城市教育委員会　1999『中狭間遺跡』
安城市教育委員会　2002『鹿乗川流域遺跡群』
安城市教育委員会　2004『鹿乗川流域遺跡群Ⅱ』
安城市教育委員会　2005『鹿乗川流域遺跡群Ⅲ』
安城市教育委員会　2006『鹿乗川流域遺跡群Ⅳ』
安城市教育委員会　2008『鹿乗川流域遺跡群Ⅴ』
安城市教育委員会　2009『鹿乗川流域遺跡群Ⅵ』
安城市教育委員会　2011『鹿乗川流域遺跡群Ⅶ』
安城市歴史博物館　2014『特別展大交流時代　鹿乗川流域遺跡群と古墳出現前夜の土器交流』
神谷友和　1985「亀塚遺跡と古井遺跡群」『安城歴史研究』10、安城市教育委員会

＊このほかの関連書籍については巻末の「桜井古墳群をもっと知るために」参照。